

| | |
|--|---|
| ○「作家の手紙」..... 1 | ○「競輪川柳」入賞作品..... 5 |
| ○企画展「生誕100年記念 伊馬春部展 一向三軒高障りの時代」..... 2 | ○企画展「森鷗外が支援した天折の天才発明家・矢頭良一展」..... 6 |
| ○岡野弘彦さん 講演会「伊馬春部の文学と人生」..... 3 | ○企画展「響き合う 詩誌「たむたむ」展 — 107号のあゆみ 詩と出会って—」..... 7 |
| ○ラジオドラマ脚本「屏風の女」を読む..... 3 | ○詩誌「たむたむ」主催 記念講演・朗読会..... 7 |
| ○文学講座..... 4 | ○対談「自分史を語ろう」..... 7 |
| ○文学館開館2周年・市制45周年記念事業..... 4 | ○岩橋邦枝・柴田翔講演会..... 8 |
| ○「杉田久女の世界を語る」..... 4 | ○自分史文学賞受賞作品決まる..... 8 |
| ○「杉田久女～その生涯と俳句」..... 5 | ○自分史ギャラリー-展示替えのお知らせ..... 8 |
| ○企画展「バンクの風-小倉から始まった競輪とロマン」..... 5 | ○予告..... 8 |
| ○小沢昭一さん講演会&映画「競輪上人行状記」上映会..... 5 | ○資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧..... 8 |
| ○白川道さん・佐木隆三対談「競輪と文学」..... 5 | |



作家の手紙

館長 佐木 隆三

昔は原稿の依頼状も手紙で、返信用のはがきで応答するのが普通だったが、今はパソコンのメールが多くなり、編集者と一度も顔を合わさずに仕事を済ませたりする。そういう時代だから、「作家の手紙」は少なくなる一方だろう。

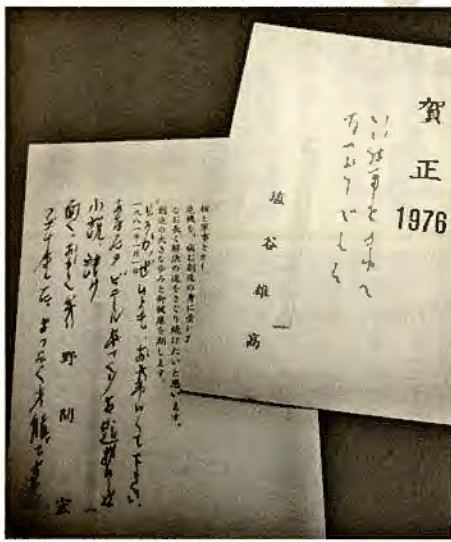
わたしが編集者に書いた手紙は、送った原稿がどうなっているのか催促したり、原稿料の前借りを懇願する内容だから、保存されていないことを祈るしかない。先輩からの戒めは、「間違っても恋文は送ってはならぬ」で、これは守ったから安心していい。

作家から頂戴した手紙（はがき）は、わたしの場合は年賀状・自著の献本への礼状などである。埴谷雄高さんの「賀正1976」に「いい仕事をしてなによりでした」と添え書きがあり、前年十一月に「復讐するは我にあり」を送ったからだ。同じ年の井上ひさし夫妻の賀状には「佐木さんが直木賞をとると主人がいつづづけています。すごくうれいす」と奥さんが書き、その通りになったからありがたい。

野間宏さんの一九八一年の賀状に、「あなたのピニール本づくりを題材にした小説を読み、面白くおかしく、笑いつづけました。

まったく才能ですよ」とあるのは、小説雑誌に書いた中編「セクシーギャルズ」を指している。生活のために中年の編集者が、若い女性のヌードを撮る苦労話で、ひたすらおだてるしかないという。

この小説が掲載された直後に、ある都市の教育委員会から「お願いしておりました講演と断りの電話が入った。むろんこれは、「こんな不謹慎な小説を書く作家の講演など教育上よろしくない」との判断からだ。小学生だった娘も、新聞広告を見た同級生から嘲笑されたとのことで、すっかり意気消沈した。そんなときに野間さんから「まったく才能ですよ」と評され、まさに複雑な心境だった。



▲ 第五回特別企画展

「生きた、書いた、愛した
女性作家の手紙展」

宇野千代、野上弥生子、宮本百合子など女性作家二十五名が、それぞれの胸のうちを明かした直筆書簡を紹介し、文学への情熱、喜びと苦悩など、女性が社会と関わり、自己を表現しようとした軌跡を展観。柳原白蓮ほか、ゆかりの作家資料も展示します。
* 会期 4月25日(土)～7月5日(日) ※月曜日休館
(ただし5月4日は開館、7日は休館)
* 観覧料 一般四〇〇円、中学生二〇〇円、小学生一〇〇円



昭和14年 吉屋信子邸にて
左から林芙美子、宇野千代、
吉屋信子、佐多稲子。

▲企画展

「生誕100年記念
伊馬春部展 一向三軒両隣の時代」

9月27日(土)～11月30日(日)



生誕一〇〇年を迎えた八幡西区木屋瀬出身の劇作家・伊馬春部の生涯と業績を展望する展覧会を開催しました。ご遺族や地元の方々からご提供いただいた自筆資料や放送台本などを展示。ラジオ、テレビ、映画、演劇、小説、作詞と、縦横な創作活動で戦前戦後のお茶の間に娯楽を届けた郷土の作家の全体像に迫りました。

伊馬春部展

一向三軒両隣の時代

展示資料約一〇〇点

入場者数二二二〇人

(イベント含む)

岡野弘彦さん 講演会

「伊馬春部の文学と人生」

10月29日(水)

本展開催を記念して、伊馬春

部とともに折口信夫(釈道空)に学んだ歌人で、国文学者の岡野弘彦さんにご講演いただきました。伊馬春部の紹介で、戦後、折口宅に寄宿。最も身近で看取った折口の晩年や文学世界、その中で伊馬との交流などについてお話しくださいました。

私は伊馬春部さんの弟子なんですけれども、折口信夫先生が四十代になられた頃、当時の國學院大學予科の学生たちが先生を囲んで短歌を創作することを核とした古典研究会「鳥船」という結社を作りました。藤井春洋さんなど創刊同人に次い

で、伊馬さんが入学され、「鳥船」の会員となられていました。その最も末輩の弟子として、私は昭和二十一年に「鳥船」に加わりました。

その時はまだ伊馬さんは外地におられ、兄弟子たちもほとんどが帰って来ていません。やがて年が変わって、二十一年になり、引き揚げて来る先輩たちが増えてきて、伊馬さんも中国から帰って来られました。

折口先生を核にした会での伊馬さんの進行は、実に柔らかくて、優しく、同時に凛としていました。進行係によって、歌会の雰囲気というものは変わります。「あのムーンラン・ルージュ

新宿座の作者として評価の高い伊馬春部さんというのは歌の会でこんな見事な司会のできる人なんだ」と思いました。

折口信夫という人は、現代を突き抜けたような人でした。伊馬さんにとっても、また、伊馬さんについて考えようとする人間にとっても、大きな問題は、この折口信夫という存在です。その出会いや師弟関係を見えますと、人間にはこれほど影響力を与える人がいるものか、と思うほどです。

伊馬さんはご存じのとおり、当地のご出身でありまして、由緒ある豊かな家に生まれたわけですが、不幸なことに、早く



岡野 弘彦さん

にまずはお母さんが、やがてお父さんが亡くなってしまわれま
す。そこで阿部王樹という伯
父さんに引き取られ、弟さんと
二人育てられることになりまし
た。やがて、「劇作家になりたい」
と國學院大學に進まれ、折口信
夫の短歌結社「鳥船」に入りま
す。ここから、伊馬さんの人生
における濃密な時間が始まって
ゆくと行ってよいのです。

一方で伊馬さんは、小説家の
井伏鱒二という、これもやはり
非常に濃密な人を、師匠として
持つておられました。そして、
この二人の間で、いろいろな心
費やされたのだと思います。

折口先生のところに行くと、
池田弥三郎さん、戸板康二さん、
そしてそのいちばん中心に伊馬
さん。週に二回くらいは必ず折
口先生のところを集まって、い
ろんな話や相談をされています。
井伏先生の用もあるはずな
のに、伊馬さんは言い出せない
ようでした。小説の書き方を知
るために伊馬さんが井伏さんの
ところへ行くことに、折口先生
はちっとも違和感を感じてはお
られなかったと思います。です

けれども、伊馬さんは何か遠慮
しておられたようです。

伊馬さんも大変だったろうと
思います。いろんな役者や作者
仲間、あるいはNHKの様々な
役職の人たちと会わなければな
らない一方で、折口先生の書齋
では心を切り替えなければなら
ず、また、太宰治など文学の友
人たちと止め処も無く酒を飲ん
で他愛のない話をする世界とい
うのも、他方にあつたわけです。
多様な交流を、伊馬さんは体験
し続けておられました。

折口先生にとって、太宰とい
うのは、伊馬春部の友だち。一
度も会ったことはないけれど、
太宰という青年作家の苦しみと
何ともいえない魂のナイーブな
様子を、伊馬さんの話から感じ
取っていました。だから、太宰
が亡くなったとき、折口先生は
「水中の友」という詩を作って
います。非常によい詩です。読
んでいるうちに、伊馬さんにも
投げかけている詩のような気が
してきました。

北九州芸術劇場小劇場
参加者Ⅱ約一五〇人

+++++
ラジオドラマ脚本
「屏風の女」を読む
10月26日(日)

鞍手郡小竹町出身で劇団「俳
優座」所属の俳優・矢野宣さんと、
小倉を拠点に活動を続ける朗読
家の三輪純子さんをお招きして、
伊馬春部のラジオドラマ「屏風
の女」の朗読会をこやのせ座で
開催しました。

「屏風の女」は昭和二十七年の
放送以来、薫り高い文学的作風
で高い評価を得、海外でも放送
された伊馬春部の代表作です。

矢野さん、三輪さんそれぞ
れのトークなども行われ、伊
馬春部の生誕地である木屋瀬
で、作品世界を満喫しました。

参加者Ⅱ二二三人

+++++
文学講座
10月11日(土)～11月29日(土)

本展監修の棧比呂子さん、梅
本静一さんほか、五名の講師を
お招きして、様々な角度から伊
馬春部の魅力についてお話しし
ていただきました。

◎ 棧比呂子さん(作家・本展監修)

◎ 「伊馬春部の時代」

◎ 矢野宣さん(俳優)

◎ 「後輩思いの先輩・伊馬春部いろい
ろ」

◎ 舌間信夫さん(詩人郷土史研究家)

◎ 「筑豊の文芸と伊馬春部」

◎ 小田次男さん(文案を描く「画家」
「僕の青春」ムーラン・ルージュ新
宿座と伊馬春部)

◎ 梅本静一さん(前北九州市教育委
員会委員長・本展監修)

◎ 「木屋瀬と伊馬春部―親族のかいま
見た春部の素顔」
受講者Ⅱ各回約二十人



矢野 宣さん(右)と三輪 純子さん



棧 比呂子さん

+++++
来館者の声
+++++
◇ 伊馬さんを知る人も年々少
なくなっている折よくぞ回顧
展を企画されたと思う。

◇ これだけの資料が集まって
いるとは思ってもいけませんで
したので感激しました。

◇ とかくエノケン、ロッパ、
夢声に目が向けられがちなの
の時代、こうした(知る人ぞ
知る)郷土の著名人の掘り起
こしは素晴らしいと思う。

◇ 音楽と映像がとても懐かし
かった。

◇ 多くの資料に出会え、大正・
昭和の文化に力をそそがれた
氏の人生に感動した。

◇ 今回初めて知った。地元の
作家についてもっと興味を持
ちたい。

◇ 伊馬さんのラジオ、幼い頃
良く聴いていました。

◇ 身近にこういう人がいた
ことを知りおどろいています。

このほか、たくさんのご感想
をいただきました。ありがた
うございます。

▲文学館開館二周年・
市制四十五周年記念事業

北九州市立文学館開館二周年記念事業、北九州市制施行四十五周年記念事業として、「杉田久女の世界を語る」、「杉田久女とその生涯と俳句」を開催しました。

開催にあたっては、榎山莊子ども俳句大会実行委員会、「久女・多佳子の会」のご支援とご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

++++++
「杉田久女の世界を語る」
10月25日(土)
++++++

「第四回榎山莊子ども俳句大会」表彰式と同時開催として、女優の栗原小巻さんをお招きし、北九州ゆかりの俳人・杉田久女について佐木館長との対談を開催しました。

栗原小巻さんは、杉田久女をモデルにしたテレビドラマ（昭和三十九年）に杉田久女の長女役でテレビ初出演しています。対談の中で、そのテレビドラマの一部が再上映されました。



また、作家・田辺聖子さんに、特別ゲストとしてビデオレターでご出演いただき、ご自身も大好きとおっしゃっておいで杉田久女への熱い思いをお話していただきました。対談は、栗原小巻さんによる、杉田久女の名句を生んだ舞台、英彦山を詠んだ随筆の朗読でしめくくり、改めて会場の杉田久女ファ



栗原小巻さん

ンに杉田久女の感性の豊かさを知っていただきました。

なお、栗原小巻さんには、対談に先立って開催した「榎山莊子ども俳句大会」表彰式にも、「栗原小巻特別賞」の選句者としてご出席いただきました。

九州厚生年金会館
参加者数 二六六四人

++++++
「杉田久女とその生涯と俳句」11月18日(火)
++++++

第二部

「杉田久女と筑紫の風土」

評伝「杉田久女」の作家・坂本宮尾さんをお招きし、杉田久女の生涯から死まで、家族とのかわりなどを、その俳句と舞台となった数々の場所やゆかり

の品を織り交ぜながらご講演いただきました。久女を愛するが故の長くけわしい調査と研究に裏打ちされた内容で、杉田久女の真の姿を浮き彫りにしていただき、会場のみなさんも大いに満足していただきました。



坂本宮尾さん

第二部

「杉田久女の魅力」

現在の俳句ブームの火付け役といえる俳人・黛まどかさんをお招きし、今川副館長を聞き手に杉田久女の魅力について語っていただきました。

黛まどかさんを俳句の世界に導いたきっかけが杉田久女の句にふれたことといわれるだけに、女流俳人のさきがけの杉田久女への愛着は人後に落ちず、軽妙洒脱に杉田久女の魅力を語って



黛まどかさん

いただきました。久女の代表句「花衣ぬぐやまつわる紐いろく」をイメージした桜色の和服姿でご登壇下さいましたが、会場の方皆さんを魅了しただけでなく、杉田久女への熱烈な愛情と敬意の表れと、その思いの深さが伝わってまいりました。

北九州芸術劇場小劇場
参加者数 一四一人



▲企画展

「バンクの風―小倉から始まった競輪とロマン」

1月20日(火)～2月22日(日)

主催：北九州市立文学館「バンクの風―小倉から始まった競輪とロマン」
実行委員会(北九州文学協会、財団法人JKA、北九州市立文学館)
協力：財団法人日本自転車普及協会



競輪発祥六十周年を記念し、競輪の文化的側面を紹介する展覧会を開催しました。

一九四八年、全国初の競輪が小倉競輪場で開催されました。当時の写真やポスターなどを展示し、競輪発祥地としての小倉を紹介。競輪開催に尽力した旧小倉市長濱田良祐氏にもスポットを当てました。

また、競輪を題材とした文学作品をイメージ写真と共にパネ

ル展示しました。坂口安吾「今日われ競輪す」、阿佐田哲也「競輪円舞曲」、佐藤正午「きみは誤解している」などの作品が並びました。

そのほか、加藤一(画家・元競輪選手)の絵画を三点展示。初期の自転車・現在の競技用自転車なども会場に並びました。

展示資料約五〇点
入場者数一六一五人
(イベント含む)

+++++
小沢昭一さん講演会&映画
「競輪上人行状記」上映会
2月11日(水・祝)

+++++
展覧会開催を記念して、俳
優の小沢昭一さんをお招きした

講演会と映画上映会を行いました。また、展覧会に伴い募集した「競輪川柳」の表彰式も行いました。映画「競輪上人行状記」(一九六三年日活、監督：西村昭五郎、原作：寺内大吉、脚色：大西信行・今村昌平)の上映会では、主演した小沢さんの若き日の迫力ある演技に拍手が起りました。続いて登場した小沢さんの話芸に会場全体がひきこまれ、最後まで笑いの絶えない講演会となりました。

北九州国際会議場メインホール
参加者 五八五人



小沢 昭一さん

+++++
白川道さん・佐木隆三
対談「競輪と文学」
2月1日(日)

+++++
展覧会開催を記念して、作家
の白川道さんをお招きし、佐木

館長との対談を開催しました。

白川さんは「流星たちの宴」「海は潤いでいた」「天国への階段」などの著書があり、競輪ファンとしても知られています。これまで書いてきた作品は、自身の体験が七割といえます。小説さながらの生き方に、佐木館長をはじめ来場者からも驚きの声が上がりました。また、一時は競輪をやめようと決意し、「引退パーティー」まで開いたが、その後やはり競輪に行ってしまった。大当たりを取ったというエピソードを披露し、競輪との縁はまだまだ切れそうにないと語りました。

参加者 約五〇人



白川 道さん(右)

「競輪川柳」入賞作品

【大賞】

筑紫野市 立山高之さん

【JKA賞】

久留米市 岩村昭雄さん

【優秀賞】

KEIRINが五輪競技の華と咲く
千葉市 高塚英雄さん

V10の中野の偉業君知るや
久留米市 堤日出緒さん

勝ち負けはべつ吉岡を買い続け
飯塚市 佐藤夏虫さん

けいりんせんしゅになるぞと孫の三輪車
北九州市 池田健太郎さん

ジャンが鳴るスピード感の溢れ出る
北九州市 前田伸江さん

人生の勝負どころに似たマクリ
東京都 伊藤三十六さん

世界一目指し坂道踏むベダル
北九州市 江越正俊さん

たまに競輪でもと妻から諭吉さま
宗像市 神谷幸恵さん

我が町の自慢競輪無法松
遠賀郡 上田益雄さん

競輪とお酒の好きな父でした
福岡市 田中登美子さん

全国から五八三句のご応募をいただきました。

選 北九州川柳作家連盟会長
手嶋 吾郎さん

北九州川柳作家連盟副会長
古谷 龍太郎さん

北九州市立文学館館長

佐木隆三

▲企画展

「森鷗外が支援した天折の

天才発明家・矢頭良一展」

9月27日(土)～4月19日(日)



明治の発明家・矢頭良一が製造した「自動算盤」

「算盤」が、現存最古の機械式計算機として日本機械学会主催の「機械遺産」に認定されたのを記念して展覧会を開催しています。

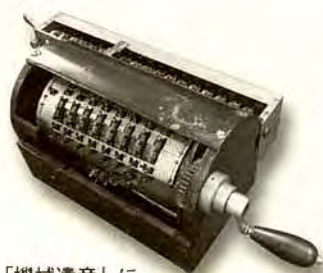


矢頭は、福岡県豊前市出身、飛行機研究の傍ら様々な発明品を世に送り出しました。本市ゆかりの作家である文豪・森鷗外は、赴任地小倉で矢頭の訪問を受け、才能を高く評価。理科大(現・東京大学理学部)での研究機会を与えます。著書「小



倉日記」には出会いが描かれ、矢頭が道半ばの三十歳で夭折したときには、「天馬行空」の書幅を遺族に贈るなど、その交流は深いものでした。

展覧会では、発明品「自動算盤」、「早繰辞書」、鷗外訪問時の札状などを展示し、その業績や生涯を紹介。また、若い才能を愛した鷗外の人物像にも迫ります。



「機械遺産」に認定された自動算盤

展示資料 約五十点

▲企画展

「響き合う 詩誌「たむたむ」展

—「一〇七号のあゆみ 時と出会う—」

12月6日(土)～1月12日(月)

地域の同人誌展シリーズ第二回は、作家・岩下俊作と高校教師・青木新六が一九七二年に創刊した詩誌「たむたむ」の活動を紹介します。これまでのあゆみのほか、同人の詩心を支える資料、一〇五号まで表紙絵を担当した画家・小島敬三郎による原画などを展示。誌名にちなむ楽器・タムタムも加わり、あたたかな叙情詩の世界と響き合いました。



展示資料 約一〇〇点

+++++
詩誌「たむたむ」主催
記念講演・朗読会
12月13日(土)
+++++

◎鍋島幹夫さん講演会

「死と詩—古賀忠昭の場合」

展覧会を記念し、詩人・鍋島幹夫さん(日氏賞受賞、梅光学院大学准教授)による講演会が行われました。久留米の詩人・古賀忠昭の濃密な詩について、DVDの映像など交え、語っていただきました。



鍋島 幹夫さん

◎同人朗読会

講演会に続き、「たむたむ」同人による朗読会を開催。自作の詩やエッセイをそれぞれの表現で読み上げました。

参加者 五八人



朗読会の様子



たむたむ展入口におかれた楽器「タムタム」

▲対談「自分史を語ろう」

佐木館長がホストを務める対談「自分史を語ろう」を第六回に続いて開催しました。

北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただいています。

【第七回】

*お話 木瀬照雄さん
11月16日(日)



北九州を代表する世界企業TOTOのトップ・木瀬照雄社長(現・会長)をゲストにお招きしました。温水洗浄便座「ウォッシュレット」の販売秘話を

はじめ、営業出身社長としての経営哲学も語ってくださいました。一方、八幡東区出身の木瀬さん。学生時代は、毎月文芸誌を読み、吉本隆明や高橋和巳に傾倒したと言います。京都大学教育学部へ進んだのは、当時流行した催眠術を勉強するためな

ど、愉快的なエピソードも披露。木瀬さんの快活な語り口へ、会場からは「本社を東京へ移さないで」などの声も上がり、大いに盛り上がりました。

【第八回】

*お話 福田浩一さん
1月25日(日)



株式会社 山口銀行・福田浩一頭取をゲストにお招きしました。

開始早々、浪人時代に初めて書いたラブレターや、きっかけは広島カープの優勝という意外な入社動機など、ユニークなエピソードを次々に愉快にお話し下さいました。

その一方で、日本銀行からの頭取も公的資金も迎えない「独立自尊」の精神や、地域社会とアジアを同時に見据える「健全なる積極進取」の姿勢など、「やまぎん」独自のビジョンについても熱く語ってくださいました。来場者からの「座右の銘は？」との問いには、「随所に主となれ」

と。時に、進行役の佐木館長に逆質問を投げかける場面も見られ、昨今の暗い経済ニュースを払拭する、活発な会となりました。

【第九回】

*お話 大神良彦さん
2月22日(日)



ゲストは、門司の総氏神として信仰を集める甲宗八幡神社の宮司・大神良彦さん。

英語教師を目指していた大学在学中に急遽神社を継ぐことになったいきさつ、若くして伝統ある神社を切り盛りする日々の苦労や喜びなど、様々なお話を披露してくださいました。

会場では、氏神社内の能舞台「神恵閣」再建を指揮した若き棟梁のご紹介もありました。対談終了後は、多くの来場者から、神社の歴史やしきたりについての質問や、若き宮司へのエールが次々に飛び出し、終了時間まで賑わいました。

▲岩橋邦枝・柴田翔講演会

2月8日(日)

北九州市自分史文学賞の審査員を務める作家の岩橋邦枝さんと柴田翔さんをお招きして講演会を開催しました。

まず岩橋さんに、「読書と創作をめぐる自分史」と題して、ご自身の体験談を交えながら、女性作家の戦後文壇についてご講演いただきました。



柴田翔さん 「未来のための日本語を」と題して、言葉とは何かという課題を紐解きながら、近代

戦前、戦後しばらくは、「文壇では女であることにハンディキャップがあり、「文学か、結婚か」の覚悟を迫られる時代、ジャーナリズムからもそのような扱われる時代であった」。野上弥生子、宮本百合子、林芙美子、曾野綾子ら多くの女性作家の悪戦苦闘があつて現在の女性文学が開かれてきたと解説。最後に、「現在、日本の女性作家は恵まれた環境の中



岩橋邦枝さん 「現代は『美しい日本語』というものが言われすぎているのではないか」と問題提起。日本語の変化を分析しながら、「思い込みの中の良い日本語に固執せず、自分と違う日本語があることを認めることが大事」であり、文学は多様性を認めて言葉を多彩にしつつ、中心には論理的な日本語が求められるものであると指摘しました。

中で次々に活躍しているが、この勢いは発展途上にある。本物の力がつくのはこれからであり、「楽しみ」と結ばれました。

次に柴田さんから「未来のための日本語を」と題して、言葉とは何かという課題を紐解きながら、近代

▲自分史文学賞受賞作品決まる

第十九回(平成二十年度)北九州市自分史文学賞は、平成二十年七月一日から九月三十日まで作品を募集し、全国および海外より三九四編の応募がありました。

一月十五日、最終審査会が行われ、大賞に大西功さん「ドックの落日」、佳作に久野利春さん「蛙の子は蛙」、森下陽さん「旅のかたち」が決定しました。なお、北九州市特別賞は、久野利春さんが同時受賞しています。

▲自分史ギャラリー展示替えのお知らせ
4月25日(土)～平成22年3月14日(日)(予定)

北九州市自分史文学賞受賞作品を紹介するコーナーを展示替えします。取り上げる作品は、第八回(平成九年度)北九州市特別賞を受賞した中元大介さん作「煤煙の街から」です。

戦後の貧しさを乗り越え、北九州に生きた青年の自分史には、一九五三年の北九州大水害に遭



遇した体験も描かれています。

予告

▲「生きた、書いた、愛した 女性作家の手紙展」記念

瀬戸内寂聴さん講演会

*日時 6月14日(日)

午後1時30分～3時

*会場 北九州芸術劇場

大ホール

*定員 1150名

応募方法は、市政日より4月15日号に掲載します。



瀬戸内 寂聴さん

▲「生きた、書いた、愛した 女性作家の手紙展」文学講座(全5回)

*日時 ①5月23日(土) 佐藤泰正さん(梅光学院大学教授)、

②5月30日(土) 萩原桂子さん(九州女子大学准教授)、③6月

6日(土) 狩野啓子さん(久留米大学教授)、④6月14日(日)

瀬戸内寂聴さん(作家)、⑤6月20日(土) 今川英子(北九州

市立文学館副館長)

各回 午後1時30分～3時

*会場 北九州市立文学館

*受講料 2000円(観覧料、資料・図録代含む)

*第4回は瀬戸内寂聴さん講演会に参加。

応募方法は、市政日より4月15日号に掲載します。

▲「佐藤さとのコロボックル物語展 だれも知らない小さな国(仮称)」
7月18日(土)～8月30日(日)

児童文学のベストセラー作品である佐藤さとの「コロボックル物語」の世界を紹介する展覧会を開催しま

す。自筆原稿などの文学資料や、村上勉による挿絵原画を展示します。



▲松本清張生誕100周年 記念事業

北九州市は、二〇〇九年に松本清張が生誕一〇〇年を迎える

ことを記念した様々な催しを開催します。全国主要都市の文学

館での巡回展の開催、著名作家による記念講演会、特別企画展

の開催、清張作品の舞台上演、清張似顔絵コンクールなどを予定

定めています。

◎資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧 (平成二十二年二月現在)

寄贈者・提供者 あざみエー

ジェント 有森信二 石山幸

弘 市川市文学プラザ 伊藤

比呂美 井上洋介 井上靖記

念文化財団 今村元市 梅本

静一 大塚郁子 大津留敬

棧比呂子 かごしま近代文学

館 鎌倉文学館 川原洋子

岸原清行 北九州漢詩会 草

野心平記念文学館 熊沢さと

み こおりやま文学の森資料

館 國學院大學折口博士記念

古代研究所 国立民族学博物

館 後藤千代実 斎藤加代子

坂本宮尾 桜井周子 宍戸節

子 舌間信夫 清田文武 仙

台文学館 添田裕吉 谷喜美

子 土田晶子 土屋文明記念

山口淑枝 山田まゆみ 大和

修 与謝野晶子文芸館 吉井

勇記念館 受贈雑誌 青嶺

あん 色鳥 沖 海峡派 牙

群炎 詩塔 自鳴鐘 周炎

川柳あやめ 川柳くろがね

川柳むらさき たむたむ 千

葉ふだん記 天籟通信 菜薹

火 虹野(五十音順・敬称略)



発行 2009年3月31日
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.city.kitakyushu.jp

■開館時間

火～金 9:30～19:00(入館は18:30まで)
土・日・祝 9:30～18:00(入館は17:30まで)

■休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始



■ JR小倉駅より徒歩15分 ■ JR西小倉駅より徒歩10分
■ 北九州市役所前バス停より徒歩2分 ■ 北九州市都市高速大手町ランプより2分
■ 駐車場は文学館最寄りの各有料駐車場をご利用下さい